

## 19世紀イギリスにおける 「少女」に関する議論とその転換点

牟田有紀子

### はじめに

Sally Mitchellの *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915* (1995) を嚆矢として、近年19世紀末の少女文化研究は発展を遂げてきた。Mitchellはあらゆる面において親世代が知り得なかったことを経験した、19世紀末から20世紀初頭の「新しい少女」(new girl) を次のように定義した。

The new girl—no longer a child, not yet a (sexual) adult—occupied a provisional free space. Girls' culture suggested new ways of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women (except in the case of the advanced few). (Mitchell 3)

ヴィクトリア朝中期においては、少女の領域が拡大することは社会不安に繋がり、批判の対象になったが、80年代にはその新しさが肯定的に語られ始めた。さらに「新しい少女」は、20世紀に入るところには少女文化を象徴するアイコンとして見なされるようになった。

Mitchellは「少女」を学術的な研究対象へと引き上げた第一人者であり、19世紀から20世紀初頭にかけての少女研究には必要不可欠な人物である。その著書では少女が新しく手に入れた文化、つまり学校教育、高等教育、雇用、スポーツやアウトドアなどの従来男性的だった余暇の過ごし方、そして読書体験が、雑誌や小説でどのように描写され、「新しい少女」に関する言説が生み出されたか詳細に論じられてきた。

しかし近年、Mitchellが明らかにしたような少女文化が、どのような過程を経て成立したのかに焦点を当てる研究に注目が集まっており、作家（編集者）主義的な少女文化の解釈からの発展が見られる。それらに共通しているのは、どのような文脈で「新しい少女」が肯定的に受け入れられたのか、ひいては少女文化のアイコンとして定着したのかという過程を中心に据えているということである。

その一環として本稿では、1880年以降の少女文化がいかにより新しいものであったか

を明確にするために、19世紀中期の少女小説と少女雑誌を取り上げ、「少女」と呼ばれる「不安定さや曖昧さ、それゆえの自由さ」（川端 17）を享受する存在が社会的にも文化的にもいかに不在であったか、もしくは“new ways of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women”を持つような少女が抑圧的に描かれていたかを検証する。最初に19世紀半ばの少女が置かれていた社会的立場を確認する。次に19世紀半ばに活躍した少女小説作家の先駆けである Charlotte M. Yonge らの小説に描かれる少女像を概観する。最後に雑誌を用いて、「少女」に関する議論に多大な影響を与えた Eliza Lynn Linton の「当世娘」(the girl of the period)<sup>1</sup> の少女文化への影響を分析し、「少女」に関する言説の転換点について考察する。これによって小説と雑誌の両方の観点から、少女文化の発展の過程の一端を明らかにしたい。

## 1. 少女の社会的立場

最初に、19世紀中期のイギリスの中産階級の少女の日常生活や、女子教育などの社会背景を確認し、どのような環境のなかで少女が読み物を経験していたのかを明らかにしたい。

ヴィクトリア朝、エドワード朝の中産階級の少女の多くは、家庭と同じく中産階級の女性が経営している小規模な私立学校で教育を受けた。少年にはグラマースクールや男子向けに設立されたアカデミーが用意されており、学校教育の後には職業訓練を受けることが期待されていた。しかし少女の場合、仮に教育を受けたとしてもそれを職業に繋げることは想定されていなかった。それは、少女の教育は経済的見返りではなく、良妻賢母に育て上げることを目的としていたためである。

家庭教育の場合、教育を担うのは両親、姉妹、親戚など身近な人々で、当然教育の質は家庭ごとに千差万別だった。加えて、レオノーア・ダヴィドフとキャサリン・ホールによると、「娘の勉強は世帯全体のさまざまな予定に合わせて、家業による邪魔が入るなかで行っていくしかなかった」(223)。上層中産階級の家庭ならば、ガヴァネスを雇ったり、両親の蔵書を読んだり、寄宿学校に入れることも可能だったが、ほとんどの中産階級の家庭では、家庭内で片手間にできる教育を施すのが通例だったと言える。更にダヴィドフとホールは、下記のように中層および下層中産階級の少女は、文化的に不利な立場にあったと指摘している。

彼女たちにとって、知的な教養を高めるための唯一の道は日曜学校であった。文化的施設は貸本屋をおいてほかにはなく、その貸本屋も多くの場合、女性の利用に制限がもうけられていた。職工学校や文芸哲学協会は、同じ階層の男性にはきわめて重要な場であったが、若い女性には通常閉ざされていた。若い女性に認められたの

は、いくつかの限られた公開行事への参加や、図書を借りて自宅で読むこと、たまに決められた時間のあいだだけ読書室を利用することくらいだっただろう。……徒弟や店員がよく利用した読書クラブ、討論クラブ、自然史実地調査クラブなども、ほとんどが若い女性には閉ざされていた。(224)

このような教養知識へのアクセスの制限の結果、彼女たちは「家族や友人や宗教仲間の外部にある世界についての知識を遮断していくことになった。不適切な内容が削除された読み物と経験不足とが相まって、男性の保護が現実に必要なとされる状況が生み出された」(ダヴィドフ・ホール 225) ののである。本稿が扱う少女雑誌の読者は、まさにこの層の若い女性である。もちろんここから時代を経るにつれ社会背景は変化していくわけだが、19世紀を通して少女雑誌の読者層は教養知識へのアクセスが上記のようにかなり制限されていたことを明示しておきたい。

このような抑圧的な環境を改善すべく Frances Mary Buss や Dorothea Beale, Emily Davies のような女子教育改革論者が立ち上がり、教育改革へと乗り出した。Buss は 1850 年に North London Collegiate School (NLCS) を開校した。NLCS は他の女子学校よりも安価で学生を受け入れた学業重視型の通学制学校である。宗教、国語、歴史、地理、算術、フランス語、ラテン語初歩、図面、合唱、自然哲学初歩、裁縫、体操、幾何を正課とし、イタリア語、ドイツ語、音楽、水彩画、ダンスを課外科目として設けた(滝内 352)。このカリキュラムだけでも、NLCS が良妻賢母になるための教養を身に着けるための学校ではなく、男性と同じ基準で学問を修めるための学校であることがわかる。更に女子学生にもケンブリッジ地方試験の受験が認められると、Buss は NLCS の学生に受験させ、高等教育機関へと送り出した(滝内 355)。

Beale は 1853 年に開校した寄宿制パブリックスクール Cheltenham Ladies College (CLC) の第二代目の校長として、学校の発展に寄与した。CLC は開校当初、良妻賢母教育のための学校だった。正課として聖書と典礼、歴史、地理、文法、算術、フランス語、音楽、図面、裁縫、課外科目としてドイツ語、イタリア語、ダンスといった伝統的な女子私営学校によくある科目を設置した(パーヴィス 106)。しかし Beale が校長になった後、女子教育改革に賛同してカリキュラムを見直し、数学、科学、ラテン語、ギリシア語を導入し、オックスフォードやケンブリッジ地方試験の受験ができるよう体制を整えた(パーヴィス 108)。

このような女子中等教育改革を皮切りに、19世紀の終わりまでに1872年結成の Girl's Public Day School Company は非宗教系のハイスクールを38校設立し、1883年結成の Church Schools Company は国教会系のハイスクールを33校設立した(パーヴィス 97)。更に同時期に90を超える女子グラマースクールが開校している(パーヴィス 97)。

しかしながら、このような改革があっても、中等教育が浸透するには時間がかかったのも事実である。女性参政権論者である Alice Zimmern は、1898 年に出版した女子教育論において、イングランドで中等教育を受けた少女の 70% は伝統的な私立学校に行っていたと述べている (Zimmern 237)。つまり、中等教育および高等教育改革は、中産階級の大半の少女にとっては現実的な出来事ではなかったと言える。しかし 19 世紀中頃までは存在していなかった選択肢が現れたことは、少女文化に衝撃を与えた。どの少女雑誌でも女子教育は頻繁に取り上げられ、学校紹介や学校小説が掲載された。学問重視の学校は現実的な選択肢とはなり得なくとも、少女が新たに獲得した、彼女たちだけの空間となり、少女文化の想像力の場となった。

中等教育よりも更に中層・下層中産階級の少女には現実的でない選択肢ではあったが、高等教育の門戸開放もまた、19 世紀後半の少女文化に欠かせない要素である。19 世紀中頃から女性の高等教育の議論が活性化し、1848 年に Queen's College, 1849 年に Bedford College が創設された。中等教育すら整備されていなかった時代のこの二つのコレッジを高等教育機関と呼ぶことはできないものの、「女性のための知的訓練の重要性にまったく新しい認識を表明」(河村 118) していた。これらのコレッジは男性と同じ水準の学問を修めることではなく、「女性の真正の教養を追求し、それによって女性の生活・人生全体を拓げる」(河村 118) ための教育機関だった。この教育改革の流れを受け、Emily Davies は 1869 年にイギリスで初めて、女性が男性と同じ教育を受けるためのコレッジを開校した。このコレッジは University of Cambridge の試験に向けて勉強させることを目的としており、1873 年に移転して Girton College となり、University of Cambridge の一部として女性の高等教育を担うこととなった。同時期に University of Oxford にも女性用コレッジが開校しているが、両大学が女性に学位を認めるのは 20 世紀半ばになってからである。ロンドン大学が 1878 年にイギリスで初めて女性の学位取得を認めているが、女性が男性と同じ教育を受けることには、学力のみではなく「女性らしさ」の問題が常に付きまとうせいで、非常に困難だった。

元は女性がリスpekタビリティを失わずにできるとされていた仕事はガヴァネスか教職のみとされていたが、女性の教育水準が上がると社会に受け皿が必要になり、19 世紀末から徐々に就労の選択肢も広がりを見せ始める。当時の中産階級の少女が、家庭や地域、宗教コミュニティの外の情報へのアクセスが非常に制限されている中、雑誌を頼りに急速に変化する社会について知ろうとしたことは想像に難くない。

教育を受ける年数や質にはばらつきがあるものの、中産階級の少女に求められるのはその後に職を見つけて経済的に自立することではなく、結婚することである。Mitchell によると、ヴィクトリア朝期イギリスの平均初婚年齢は、女性が 25 歳、男性が 27 歳から 28 歳だった (Daily Life 146)。労働者階級はこれよりも少し平均が下

がり、中産階級は男女とも30歳を超えて結婚することも珍しくなかった (Mitchell, *Daily Life* 146-47)。結婚して家庭を守ることが女性の最大の使命とみなされていたことに変わりはなく、女子教育がどれだけ発展しても、常に結婚という壁がそれ以上の女性の社会進出を阻んでいたことは言うまでもない。

一方で、1885年に女性の結婚同意年齢が16歳に引き上げられたことも、子どもと大人の線引きにおいて重要だろう。実際に結婚するためには21歳までは父親の同意が必要だった。教育という選択肢が増え、結婚年齢が上がると、子どもから大人になるまでの時間が延長される。女性が「少女」でいられる時間が長くなり、その期間が「少女時代」として定着していった。この期間が生まれることで、少女文化も誕生したのである。

中産階級の少女は、19世紀半ばからの教育改革により、体系化した中等教育を受けることも、男性と同じ水準で学ぶ高等教育機関に進学することもできるようになった。教育を受けた少女がガヴァネスと教職以外の仕事を持つ機会も増えた。しかし先述の通り、教育改革や就労の拡大がすぐに多くの少女の生活を一変させたわけではない。19世紀を通して、女性が人生の大半を過ごすのは家庭であり、家計を支える経済力を持つことを期待されてはいなかった。一方で、教育課程の見直しや法定結婚同意年齢の引き上げにより、少女でいられる時間が長くなったことや、このような人生の選択肢が増えたことは確実に少女文化の発展に影響を与えた。次節以降ではそのような社会的背景の変化に後押しされた少女文化を検証したい。

## 2. 中産階級の少女の読書事情と少女小説

少女小説というジャンルの確立と流行は、19世紀の少女文化の発展に最も貢献した出来事だっただろう。「少女」が、教育や就労の見直しに端を発する社会的要請のもとに誕生した概念である限り、それ以前は「少女小説」の原型と呼ばれるものであっても、ジャンルとしては成立し得なかった。少女小説の定義は困難であるものの、いわゆる子どもとしての少女や若い未婚の女性が主人公である小説、もしくはそのような世代に向けて書かれた小説と置いていいだろう。川端有子が言うように、Jane AustenやBrontë姉妹の作品群は、結婚前の若い女性を主人公としており、少女小説の原型であると言えるかもしれない (川端 6)。また、Charles Dickensの*The Old Curiosity Shop* (1841) のNell Trentや*Bleak House* (1853) のEsther Summersonもまた主人公 (格) として活躍する少女である。しかしこれらの小説は、若い女性を中心人物に据えているものの、少女に向けて書かれたものではないだろう。また、彼女らには、結婚や経済的自立、家族のケアなどの使命が課されており、「不安定さや曖昧さ、それゆえの自由さ」を楽しむ少女であるとは言えない。

では少女に向けて書かれた少女小説はいつ登場し、どのような過程を経てジャンル

として成立したのだろうか。少女小説の先駆けとしてまず挙げられるのが、Sarah Fieldingの*The Governess; or, The Little Female Academy* (1749)である。18世紀後半には、Lucy Cameron, Maria Edgeworth, Maria Hack, Mary Martha Sherwood, Sarah Trimmerのような子ども向けの物語を書く女性作家がすでに多く活躍しており、Hannah Moreのように子ども向けに書かれたものではなくとも、よく子どもに読まれた作家もいた(Butts 109)。彼女らが書いた小説は“predominantly moral, didactic, and realistic fiction”(Butts 109)で、楽しさを提供するよりも真面目で勤勉な子どもを描くことに重きを置いた。19世紀に入ると、Barbara Hoflandの*The History of an Officer's Widow, and Her Young Family* (1809)やSherwoodの*The History of the Fairchild Family* (1812, 42, 47)のような、後に少女小説の主流となる家庭小説が登場した。1850年代には少女をロマンス小説が与えるとされていた悪影響から守るために、キリスト教の教えと道徳を強調した少女小説が発達し、特にSusan Warnerの*The Wide, Wide World* (1850)はアメリカから輸入されてイギリスでも大流行した。

19世紀中期を代表する教訓的、道徳的な少女小説の代表と言え、*“the literary giant whose tenuous influence no English woman entirely escapes”* (Cadogan and Craig 29)であるYongeの小説*The Daisy Chain, Or, Aspirations: A Family Chronicle* (1856; 以下DC)である。Yongeは少女をメインターゲットにした最初の雑誌の一つである*Monthly Packet of Evening Readings for Younger Members of the English Church*<sup>2</sup> (1851-1899; 以下MP)の編集者であり、DCはYongeの思想や、本稿の目的である「不安定さや曖昧さ、それゆえの自由さ」を享受する少女の不在を確認する好例であるため、詳しく見ていきたい。

Yongeは多作な作家で、*The Heir of the Redclyffe* (1853)のように広く読まれた作品があるが、その中でもDCはMPで1853年から55年にかけて連載された。これは56年に単行本として出版された作品で、明確に少女読者に向けて書かれた小説である。DCでは家庭、宗教、地域社会に強く縛り付けられ、自由意思を持つことを許されなかった19世紀の中産階級の少女の姿を捉えることができる。

DCの舞台は19世紀半ばのイギリスで、May家の人々の7年間の家庭生活を追った物語である。May家の父親は医者として一家を経済的に支えており、母親はいわゆる「家庭の天使」と呼ばれるような良妻賢母であり、この家族の精神的支柱である。子どもは11人おり、男が5人、女が6人である。物語の導入部では、幸福な家庭生活を営む家族の姿が描かれている。しかし交通事故に遭ったMay夫人が死亡し、長女のMargaretが下半身不随になると、精神的支柱を失ったMay家は混乱に陥る。May氏は絶対権力として家庭に君臨して子どもたちを厳しく指導し、半身不随になったMargaret、次女のFlora、三女のEthel (Etheldred) が子どもらしさを捨て、大人へ

と成長することが期待されることになる。子どもが20歳の長男から生後間もない赤ん坊まで11人もおり、それぞれのエピソードが展開されているが、ここでは年長の姉妹たちに焦点を当てたい。

Margaretは精神的には母親の性質を受け継いでいるが、物理的に動くことができず、「家庭の天使」としての役割を全うすることができない。Floraは献身的に家族のために尽くしているが、Margaretほど母親に近い存在にも、Ethelほど父親に近い存在にもなることができない。15歳のEthelは頑固で不器用だが知的的好奇心が高く、弟のNormanとの勉強の時間を楽しんでいる。しかしながら、母親が他界し、Margaretが下半身不随になったことでEthelとFloraに家庭を守る責任が生じる。Ethelは彼女の子ども時代の象徴である学問を諦め、父親の指導のもとにイングランド国教会への信心を深め、貧しい隣村に教会と学校を建設することを“aspirations”とすることを決心する。

エセルには様々な面においてYongeの自己投影が描かれており (Foster and Simons 72), Yongeの理想とする少女像が示されている。例えば、Ethelが15歳にして家計の助けにするために書き物をしていること、父親から宗教の指導を受けていること、生涯独身を貫いて家族とイングランド国教会のために人生を捧げたことが挙げられる。そしてMay氏に描かれる宗教的権威としての父親像とその下で成長する少女との関係は、DCのみならず、MPやYonge自身が考える、人間の自然な在り方である。

Ethelは自分の使命を理解したとき、“My course and aim are straight on, and He will direct my paths” (DC 308) と言う。Ethelは自分の導き手として父親がおり、そしてその先には神がいることをはっきりと自覚する。Ethelは自己犠牲の精神を家族（特に父親）、宗教、地域に認められた少女として描かれているのである。Ethelについて、CadoganとCraigは、“Ethel’s reforming instinct must have appealed to Miss Yonge’s readers as strongly as Florence Nightingale’s achievements in the Crimea in indicating aspects of worthwhile feminine behaviour less restrictive than the tedium of drawing room gossip and embroidery” (20)と述べる。EthelはNightingaleと同様に、弱者を救うために献身的に働いたヴィクトリア朝中期の女性観を体現する存在だったため、DCは多くの読者を獲得し、19世紀を通して読まれ続けたのである。

Ethelとは対照的に、Floraは父親の指導やYongeの理想に従わない「悪い」少女として描かれている。彼女は勉学ではEthelには届かないものの、美しく、家事も社交も得意なことに自信を持っている。Margaretが動けず、Ethelは家事が得意ではない分、彼女が幼い弟妹の面倒を見ているし、街の婦人会が開いたバザーでは品物集めに奔走して、Ethelの教会と学校作りの建設資金を捻出している。成長して裕福な男

性と結婚すると、夫が立候補した下院議員選挙でも活躍し、見事夫を当選へと導く。このようにFloraは家庭の内外でその能力を発揮することができる有能な人物である。しかし、彼女が物語の中でその能力に見合った扱いを受けることはない。Yongeがこのような女性をどのように見ていたのかは、Floraの娘の死に集約されている。彼女が社交に精を出して家を空けることが多くなると、子どもは乳母に預けっぱなしになる。乳母は泣き止まない赤ん坊を黙らせるためにアヘンを飲ませて死なせてしまう。これはFloraが女性としての役割と責任を理解していないことへの罰である。Ethelに会ったFloraは次のようにその後悔を告白する。

“You do not know,” continued Flora, “how greedy I was of credit and affection. It made me jealous of Ethel herself, as long as we were in the same sphere; and when I felt that she was more to papa than I could be, I looked beyond home for praise. I don’t think the things I did were bad in themselves—brought up as I have been, they could hardly be so. I knew what merits praise and blame too well for that—but oh! the motive.” (DC 297)

この告白には、Floraが父親による指導を適切に理解していないために、父親に近い存在であるEthelに嫉妬してしまい、称賛を家庭の外へと求めてしまったという彼女の罪が表れている。Floraは家庭の外でその能力を発揮できる人物で、「新しい少女」の原型として捉えることもできるだろう。しかしYongeはFloraを、人々からの称賛と裕福な暮らしを求めて、家庭という女性の最大の責任を軽視する罪深き人間として描き、読者に警告している。EthelとFloraの対照的な物語は、個人としての人生を捨て、他者のために生きること、そして進むべき道は自分で決めるものではなく、父親による宗教教育を通して決まるものであるというYongeの強い思想を示している。この思想はMPの編集方針にも表れており、イングランド国教会、教会と読者の仲介者としての編集者、そして導かれるべき存在の読者という関係性が最後まで崩れることはなかった。これについては次節で詳述したい。

19世紀半ばは女性としての責任を果たすために、子どもでいることを潔く諦めたEthelが称賛される時代であった一方で、少女時代を楽しみ、大人になることへの葛藤を抱く少女が描かれるようにもなった。その最初期の小説としてLouisa May Alcottの*Little Women* (1868; 以下LW)を挙げることができるだろう。

LWはアメリカを舞台に、従軍牧師として南北戦争に出征している父親が不在の間の、母親と16歳のMeg、15歳のJo、13歳のBeth、12歳のAmyの日常を描いた物語である。不在なのが父親か母親かという違いはあるが、LWの設定はDCと似ている点が多々ある。特にEthelとJoには多くの共通点がある。がさつで所謂女性らしさに

欠け、裁縫や料理よりも読書や勉強を好み、物書きを得意としていて、最終的に学校を作る。しかし“Jo is best remembered as a coltish teenager with literary ambitions and a contempt for affectation, and she epitomizes the desire of many girls for participation in intellectual life” (Cadogan and Craig 37) とある通り、Ethelは“literary ambitions”を宗教へと方向転換を余儀なくされ、その諦めを称賛される一方で、Joはその“literary ambitions”を捨てなかったことが読者の共感を得ている。加えてMarch一家の「息子」を自称したり、Laurieとの結婚を断ったりして、大人の女性になることを拒絶する姿が肯定的に描かれており、DCのようなそれ以前の少女小説とは一線を画する。

Drotnerは、19世紀の中産階級の子どもにとって“Any sign of curiosity or spontaneity was regarded as a prime sign of sinfulness” (39) だったと述べている。四姉妹のうち、少なくともMegとJoはすでに「子ども」という年齢ではなかったものの、まさに“curiosity or spontaneity”の塊であるJoのような人物を描いたのはAlcottの功績である。英米で広く読まれていたことを考えると、少女読者はEthelを称賛する精神を共有しながらも、その閉塞感から解放してくれるような主人公の登場が待たれていたのかもしれない<sup>3</sup>。

もちろんAlcottがこのような物語を書くことができたのは、アメリカの作家だったからでもある。川端はこれについて、「おとなの規律に対する子どもの絶対服従を要請したイギリスに対し、アメリカはその建国の精神から『独立』、『セルフヘルプ』を旨とし、そのため子どものしつけにも——それが女の子の場合であっても——独立と自主性を認めたのだ」(8-9) と述べている。CadoganとCraigもまた、このような物語が可能になった背景として、“The March sisters echo their author’s determination to become financially self-supporting” (36) と、経済的な独立の必要性を例に挙げている。この点からDCとLMを比べてみても、社会的要請によって描かれる少女像の違いが生まれることは明白である。

最後に、J. S. Brattonは、社会と少女小説の発展の関係について以下のように述べている。

Here, too, the development in fiction aimed at the moulding of aspirations and expectations to fit readers for a social role which was being newly defined. The wave of self-consciousness amongst the middle classes which the social, political, religious and economic changes of the century combined to generate had as one of its forms in 1850s and 1860s a surge of questioning and redefining the female roles. (Bratton 148)

19世紀中期における少女小説の発展は、社会が変化しつつあるために可能になったと考えられる。女性は、制度的にはそれ以前よりも良い教育を受けることが可能になり、就労の機会も増えた。一方で、社会が変化しようとしているからこそ、女性の役割を「正しく」教育しなければならないと考える作家らによって、「少女」と言われる年代の若い女性が主人公の物語が生まれ始めたと言えるだろう。しかしながら、「教育されるべき」少女が主人公で、子どもでいることを諦めることが称賛される限り、「新しい少女」は生まれえない。これがこの時代の限界である。19世紀半ばという時代は、イングランド国教会や家庭に尽くす女性を称賛する伝統的女性性を是認しながらも、自由意思を持つ少女が描かれ始めた、少女小説の黎明期だった。次節では、この少女観の揺れがどのように表れたのかを見ていきたい。

### 3. 雑誌による少女に関する議論

19世紀半ばの少女小説は、新しい価値観と旧来的な価値観の狭間にいる少女を描き出した。小説の結論が結婚や家庭に収められる保守的なものであったとしても、FloraやJoのような自由意思を持つ少女が描かれたことは大きな転換点であったと言えるだろう。一方雑誌は、小説のように、少女に起こったわずかな変化を慈しむように描くというよりは、少女を巡る議論の衝突を盛り上げた。どのような背景からこの衝突が生じたのかを明らかにしていく。

19世紀の前半は、子ども向け宗教雑誌が花開いた時代である。19世紀初頭には宗教団体から子ども用の安価な雑誌が出ていた。1805年には、Sunday School UnionのWilliam Lloydが初めての子ども向け宗教雑誌と言われている*Youth's Magazine; or, Evangelical Miscellany*を出版した。1824年にはReligious Tract Societyが*Child's Companion; or, Sunday Scholar's Reward*を出版し、4年後には月に2万部売り上げるようになった。Baptist Missionary Societyが1845年に出した*Juvenile Missionary Herald*は2年目には月に4万5千部が売れた。これらの雑誌の主な読み手は、労働者階級から下層中産階級の子どもだった。特に労働者階級にとっては日曜学校がほぼ唯一の教育を受ける場であり、日曜学校は教会による慈善活動で成り立っていたため、宗教的な読み物が宗教教育、識字教育の一環として容易に子どもたちに受け入れられた。加えてこれらの雑誌は1ペニーや半ペニー程度の非常に安価なものだったので、貧しい家庭でも購入することができて、単行本とは比べものにならない数売ることができた (Drotner 36)。

中産階級の大人の女性向けの雑誌としては、*Mrs. Beeton's Book of Household Management* (1861) の著者として有名なIsabella Beetonとその夫Samuel Orchart Beetonが出版した*Englishwoman's Domestic Magazine* (1852-79) が、1857年には5万部を売り上げるようになり、ヴィクトリア朝期の主婦観の礎を作った。Isabellaの

死後も、Samuelは主婦だけでなく、若い女性向けの雑誌*Young Englishwoman* (1864-77) や*Queen* (1860-1970) を出版し、いわゆる主婦層に加えて、10代の女性も取り込んでいった。ただし、これらの若い女性向けの雑誌は、洋服の型紙やファッションプレート、手芸などが話題の中心であり、1880年以降の「新しい少女」向けの教育やキャリア形成を取り上げた雑誌とは性格が異なっている。この時点では、Beetonが未婚の若い女性が購買力を持つ消費者として見なし、彼女らのための雑誌を作ろうとしたこと自体が重要であった。

更に彼は*Boy's Own Magazine* (1855-74) のような子ども向けの雑誌までも成功に導いた。この雑誌は先述の子ども向け宗教雑誌とは異なり、明確に中産階級の少年をターゲットにした雑誌である。Moruziによると、1824年にイングランドで若い人々向けに出版されていた雑誌はわずか24タイトルのみだったが、1900年には160タイトルに急増した(“Children's Periodicals” 294)。多くは1、2年で廃刊になってしまったが、そのような状況の中、20年近く続く雑誌が出たことにより、中産階級の少年向けのジャーナリズムが確立した。Beetonらの活躍により、1850年代から60年代は、中産階級の若い女性や子どものための雑誌が出版されるようになった新しいジャーナリズムの黎明期となった。

このような背景の中で、Yongeは1851年、“young girls, or maidens, or young ladies, whichever you like to be called, who are above the age of childhood, and who are either looking back on school-days with regret, or else pursuing the most important part of education, namely, self-education” (Yonge, “Introductory Letter” i) に向けて、*MP*を出版した。ターゲットをwomanやladyだけではなく“girls”に定め、もう子どもではないけれどもまだ大人になりきってもない女性用の最初の雑誌の一つである。Yongeは*MP*を通してイングランド国教会の中産階級の10代半ばから20代半ばの少女の倫理教育に努めた。*MP*はYongeが約40年間一人で編集長を務めた月刊誌で、値段は6ペンス(～1857)、8ペンス(～1865)、1シリング(1866～)と時代によって異なる。廃刊までの約50年間にわたって、歴史の講義“*Cameos from English History*”シリーズや、キリスト教の講義“*Conversations on Catechism*”シリーズ、自己犠牲の精神を説く物語やエッセイを掲載し続けた。

第1号の“Introductory Letter”には、この雑誌の方向性が次のように書かれている。

It has been said that every one forms their own character between the ages of fifteen and five-and twenty, and this Magazine is meant to be in some degree a help to those who are thus forming it; not as a guide, since that is the part of deeper and graver books, but as a companion in times of recreation, which may help you to perceive how to bring your religious principles to bear upon your

daily life, may show you the examples, both good and evil, of historical persons, and may tell you of the workings of God's providence both here and in other lands. (Yonge i-ii)

引用によると、MPは指南書としてではなく余暇のお供として、15歳から25歳までの間の少女の人格形成を手助けするために作られた。ここで連載されたのが、先述のDCである。EthelとFloraの物語を考慮すると、ここで言う人格形成とは、少女にしっかりと現実を目を向けさせ、地に足をつけて生活する大人へと成長させるということである。Yongeにとっては、Floraのように自分の能力を家庭の外で活かしたいという願望も非現実的であるし、現実世界に存在しないものを妄想するのも同じく罪深いことだった。例えば19世紀の前半には地質学や生物学が発達し、1842年には恐竜という生物が古代に存在していたと定義された。このことについて、Yongeは1866年の“Letters on Geology”で、下記のように実際に存在した巨大生物と空想世界の珍獣を混同してはいけないと読者に釘を刺す。

We need not go to fairy tales in search of monsters or marvels, for geology can show us creatures quite as wonderful and terrible as any we should there meet with. Even the old dragons and chimeras of ancient times, which those great heroes—Jason and Bellerophon—overcame, are scarcely stranger in their fancy than these old-world types in their reality. Pegasus himself, the wonderful winged horse, and the “Worms” of northern legend, may owe their invention to the discovery of some of these skeletons, rather than wholly to human imagination, though doubtless they are indebted to this also. Let me ask you to mark that word invention—how it means really a discovery, or something found out, not, as we have come to use it, a new creation. (75)

新しく発見された生物の地質学的な知識を教授することによって、読者に現実を見る方法を身に付けさせようとしてるYongeの編集方針が覗える。1850年代は、Yongeが目指す現実を生きる少女の育成が称賛の対象になった。Yongeは、読者をイングランド国教会の信者に限定していたため、教義に則った彼女の教えが読者に受け入れられるのも至極当然のことである。次に、より幅広い読者を持つ雑誌における議論とその影響の例を挙げてみたい。

1868年、Lintonは匿名で*Saturday Review*に“The Girl of the Period”という記事を寄稿した。Lintonはこのエッセイで流行を追って外見の華やかさを追求し、伝統的道德観を軽視し、自己表現や利那的な享楽を重要視する少女を痛烈に批判した。

彼女は古き良き時代の少女が戻ってくることを熱望していたのだ。「当世娘」という言葉は、Lintonが意図した以上の意味で各種雑誌や新聞で悪用され、新しい文化を享受する世代を批判するときの決まり文句として使用された (Onslow 100)。このエッセイが話題になり、センセーションを巻き起こしたため、匿名だった著者がLintonであることもすぐに明らかになった。

しかしこのエッセイが世に出たことで新しい世代の少女が可視化されたとも言える。事実、Moruziが述べるように、大人の男性をメインターゲットにしているような *Macmillan's Magazine* (1859-1907), *Punch* (1841-2002), *Eclectic Review* (1805-68), などの雑誌では、滅多に女性の権利について報じることはなかったが、Lintonのエッセイはそのような雑誌にも取り上げられた (Moruzi, *Constructing Girlhood* 61)。これは未知の存在である「当世娘」が社会秩序を崩す脅威として認識されていたということを示している。

Lintonはイギリスで女性として初めてプロとして給与をもらうようになったジャーナリストであり、小説も多く書いている。経済的に自立した女性の先駆けだが、書いたものは、参政権を求める女性を否定した “Wild Women as Politicians” (1891) なども含めて、反フェミニズムであるという矛盾した存在でもある。

The Girl of the Period is a creature who dyes her hair and paints her face, as the first articles of her personal religion—a creature whose sole idea of life is fun; whose sole aim is unbounded luxury; and whose dress is the chief object of such thought and intellect as she possesses. Her main endeavour is to outvie her neighbours in the extravagance of fashion. No matter if, in the time of crinolines, she sacrifices decency; in the time of trains, cleanliness; in the time of tied-back skirts, modesty; no matter either, if she makes herself a nuisance and an inconvenience to every one she meets;—the Girl of the Period has done away with such moral muffishness as consideration for others, or regard for counsel and rebuke. It was all very well in old-fashioned times, when fathers and mothers had some authority and were treated with respect, to be tutored and made to obey, but she is far too fast and flourishing to be stopped in mid-career by these slow old morals; and as she lives to please herself, she does not care if she displeases every one else. (Linton 2-3; 下線は筆者による)

Lintonは公共の風俗を乱すような存在は否定されるべきだと主張するわけだが、このエッセイは極めて公共性の低い議論であると言わざるを得ない。彼女はいわゆる女性らしさを捨てることなく女性の領域を拡大し、家庭の天使でも売春婦でもないリス

ペクタブルな女性が大勢いることを完全に無視しているとして批判の対象にもなった。その動きの一つとして、*Girl of the Period Miscellany* (1869; 以下GPM) という雑誌の出版が挙げられる。

GPMは1869年に出版された月刊誌で、9ヶ月のみの出版という短命な雑誌ではあるものの、雑誌における少女観の転換期を象徴するものと見なされている。そのタイトルから明らかなように、もちろんLintonの“The Girl of the Period”へのカウンターアクトとして出版された。*Punch*のような雑誌では「当世娘」が戯画化されて風刺の対象となることが多かったが、GPMはこの議論にコメディタッチを加えながらも真面目に反応した。例えば、第2号に掲載されている詩“Lines by a Girl of the Future to a Girl of the Period”は、次のように母親世代の頭の固さを揶揄している。

Who taught me that our English ways,/ So highly prized in former days,/ In her  
time only bred amaze?/ My Mother!  
Whose ev'ry action went to show/ That homely virtues were all slow,/ And fit  
but for the mean and low? / My Mother!  
That girls of spirit ne'er should care/ For aught on earth save what they wear  
—/ Short skirts—high heels—and false dyed hair?/ My Mother! (37)

このような内容が7回繰り返されている。YongeやLintonの言うところの美德はまるでこの時代の少女には響いておらず、時代遅れであると皮肉に言い切っている。

エッセイの内容も“The Girl of the Period”に関連したものが多く、“Irish Girls of the Period”や“American Girls of the Period”などのシリーズでは、他国の少女が置かれている状況を報じている。また女性の教育や仕事についても取り上げており、第3号の“The Education of Women; Science or Confessional?”というエッセイからの次の引用によると、教育における男性優位を認めつつも、女性の興味やその追求が奪われてはならないと主張している。“In brief, and once more, the natural tendency of the female intellect is not scientific, and never will be. But women cannot be shut out of the dominant tendencies of their time, or refused their own choices of pursuits.” (“The Education of Women” 70) 親の指南に従って生きることが美德とされた時代は過ぎ、少女が限られた権利のなかではあるものの、自由に生きることを肯定的に主張している。

つまりGPMの世界では、Moruziが次の引用で定義するように、「当世娘」は自由意思を持ち、母親世代とは異なる文化を生きる存在である。

As a consequence, the *Miscellany* highlights the ambiguous definitions of



girlhood in the late 1860s and early 1870s, where the “girl of the period” became a label for any girl (or woman) who sought active participation in the public sphere and who demanded opportunities for better education, rights, and legal protection. (Moruzi, *Constructing Girlhood* 53)

“any girl (or woman) who sought active participation in the public sphere and who demanded opportunities for better education, rights, and legal protection” とはまさに Flora や Jo のような少女ではないだろう

か。GPM は彼女たちのように、家庭の外へと視野を広げた少女を肯定的に受け止め、Linton が見落としたより幅広い意味での「少女」についての公共性の高い議論を試みた。

MP にも “The Girl of the Period” にも挿絵はないが、GPM には挿絵が多いのも特徴的である。上のイラストの様々な職を持つ少女たちのように、視覚的にも Linton が嫌悪する「当世娘」を描き出した (“Girls Who Work” 17)。

GPM の編集者は、“What is the Girl of the Period?” という問いかけに対し、次のように答える。

Of course, to begin with, the period has a good many girls. Girls are everywhere. You cannot go into society, you cannot go to church, you cannot visit the theatre, you cannot walk the streets, without meeting girls. These girls are all girls of the period, because they exist at the present hour. (“The Irony of the Situation” 33)

Linton の仮想敵である「当世娘」が一体どこに、何人いるのか答えることはできな

い。今を生きている少女は全員「当世娘」であると揚げ足を取っている。ユーモアある回答だが、この態度が後の少女向けのジャーナリズムにおいて重要である。

1880年以降、つまり19世紀イギリス少女雑誌の代表格*Girl's Own Paper* (1880-1907) が登場して以降は、年齢的にも地理的にも可能な限り広く、読者に「不安定さや曖昧さ、それゆえの自由さ」を享受する少女であれと語りかけた。YongeやLintonのように、彼女たちの定義に当てはまるのが少女なのではなく、全ての若い女性が少女なのだと認識が変化する。GPMが出版されたのはたった9ヶ月だったが、「少女とは何者か」という議論に一石を投じるには十分だったと言えるだろう。

最後に、“*Girl of the Period*”とGPMの後世への影響を一つ挙げたい。作家Alice Corkranが編集者を務めた少女雑誌*Girl's Realm* (1898-1915; 以下GR)は、一部6ペンスの月刊誌だった。メインターゲットを「新しい女」(*New Woman*)に据えた姉妹誌の精神を引き継いだGRは、女子教育やキャリア形成を大いに歓迎している。この雑誌も根底にはキリスト教的精神が流れているものの、極めて商業主義的な内容となっており、読者増加のためにあらゆる手を使うような雑誌である。読者層は、読者投稿欄で確認できる最年少読者は6歳で、初期には10歳から14歳程度の読者が多かったが、出版から数年後には20代半ばまでターゲットとしていた。この雑誌には、“*Chat with the Girl of the Period*”という、編集長から読者への言葉のコーナーがある。編集長が読者に知ってもらいたいこと、考えてほしいことを書いている。第2号では、そのコーナーの名前が“*Chat with the Girl of the Period*”である理由を説明している。もちろんLintonのエッセイから名前を取っているわけだが、そこには読者を否定する意味はなく、むしろ“*Every period has its girls and you are the girls of yours. I think that I know a good deal about you; and that I appreciate the attitude you adopt towards life*” (216)と、自分の人生が自分のものであると考えてほしいと読者に語りかける。そして一世代前の少女に向ける言葉の多くは“*Don't*”だったが、今必要なのは“*Do*”であると、少女たちに意欲を行動に移すよう鼓舞している (216)。MPに始まり、“*Girl of the Period*”を経た少女に関する議論は、GPMで転換を迎え、世紀末には「当世娘」は現代的な少女観を表す言葉へと変化した。雑誌は少女観の変化に小説よりも敏感に反応しており、より明確に「少女」に関する言説の変化の過程を映し出している。

## 終わりに

1850年代から60年代のイギリスでは、教育改革が起こり、制度上は若い中産階級の女性が中等教育以上の教育にアクセスできるようになり、また就労の機会も増えた。もちろん教育も就労も一握りしかアクセスできないものであり、少女は制度と実態が一致しない不安定な社会的立場に立たされていた。この希望と不安の入り混じる

少女の生活が同時代の少女小説に現れるようになった。雑誌ではYongeが自己犠牲の精神を50年間説き続ける一方で、Lintonのエッセイが大きなセンセーションを巻き起こし、少女とは何者かという議論が加速した。GPMはその議論に反応し、YongeやLintonが想定していなかったより広義の「少女」という存在を肯定的に描いた。この動きは1880年以降に結実し、世紀末には“Do”へと行動を移すことができる少女のガールパワーが寿がれるようになった。1880年以降に登場する「新しい少女」は、新旧の議論がぶつかり合うことで生まれた概念なのである。その後「新しい少女」がどのように発展を遂げたかは別の機会の課題としたい。

(本稿はJSPS科研費 19K13111 (イギリス少女雑誌における「新しい少女」と「新しい読者」の形成)の助成を受けている。)

#### 《註》

1. 混同を避けるため、後述のエッセイを“Girl of the Period”と記し、そこで描かれているような新しい文化を持つ少女を「当世娘」と記す。
2. タイトルは1866年に*Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church*に変更された。
3. Anne Boyd Riouxは*Little Women*の読者人気について、“Alcott’s novel [*Little Women*] was, for instance, the book most frequently mentioned in the diaries of late-nineteenth-century young women”と述べている。

#### 《引用文献一覧》

- Bratton, J. S. *The Impact of Victorian Children’s Fiction*. Routledge, 1981.
- Butts, Dennis. “Finding and Sustaining a Popular Appeal: The Case of Barbara Hofland.” *Popular Children’s Literature in Britain*, edited by Julia Briggs, et al., Routledge, 2008, pp. 106-21.
- Cadogan, Mary and Patricia Craig. *You’re A Brick, Angela! A New Look at Girl’s Fiction from 1839-1975*. Victor Gollanz, 1976.
- “Chat with the Girl of the Period.” *Girl’s Realm*, vol. 1, no. 2, Dec. 1898, p. 216.
- Drotner, Kirsten. *English Children and Their Magazines, 1751-1945*. Yale UP, 1988.
- “The Education of Women: Science or Confessional?” *Girl of the Period Miscellany*, vol. 1, no. 3, May 1869, pp. 69-70.
- “Girls Who Work.” *Girl of the Period Miscellany*, vol. 1, no. 1, Mar. 1869, p. 17.
- “The Irony of the Situation.” *Girl of the Period Miscellany*, vol. 1, no. 2, Apr. 1869, pp. 33-34.
- “Lines by a Girl of the Future to a Girl of the Period.” *Girl of the Period Miscellany*, vol. 1, no. 2, Apr. 1869, p. 37.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls’ Culture in England, 1880-1915*. Columbia UP, 1995.
- . *Daily Life in Victorian England*. Greenwood, 2008.
- Moruzi, Kristine. *Constructing Girlhood through the Periodical Press, 1850-1915*. Routledge, 2012.
- . “Children’s Periodicals.” *The Routledge Handbook to Nineteenth-Century British Periodicals and Newspapers*, edited by Andrew King, et al, Routledge, 2016, pp. 293-306.

- Onslow, Barbara. *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain*. Macmillan, 2000.
- Rioux, Anne Boyd. *Meg, Jo, Beth, Amy: The Story of Little Women and Why It Still Matters*. Norton, 2018.
- Zimmern, Alice. *The Renaissance of Girl's Education in England: A Record of Fifty Years' Progress*. A. D. Iness, 1898.
- Yonge, Charlotte Mary. "Introductory Letter." *Monthly Packet of Evening Readings for Younger Members of the English Church: First Series*, vol. 1 no. 1, Jan. 1851, pp. i-iv.
- . *The Daisy Chain; Or, Aspirations: A Family Chronicle*. D. Appleton, 1856.
- . "Letters on Geology." *Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church; New Series*, vol. 2, no. 7, 1 July 1866, pp. 70-78.
- 川端有子 『少女小説から世界が見える——ベリースはなぜ英語が話せたか』 河出書房新社, 2006年。
- 河村貞枝 「イギリスにおける『ミネルヴァの娘たち』の挑戦——ベドフォード・カレッジの創設と発展」『女性と高等教育——機械拡張と社会的相克』香川せつ子・河村貞枝編, 昭和堂, 2008年。
- ダヴィドフ, レオノーア, キャサリン・ホール 『家族の命運——イングランド中産階級の男と女1780-1850』山口みどり, 梅垣千尋, 長谷川隆彦訳, 名古屋大学出版会, 2019年。
- 滝内大三 『イングランド女子教育史研究』法律文化社, 1994年。
- パーヴィス, ジューン 『ヴィクトリア時代の女性と教育——社会階級とジェンダー』ミネルヴァ書房, 1991年。